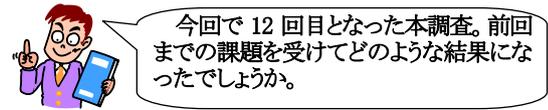


平成25年度「算数・数学つまずき調査・学習意識調査」報告およびまとめ

I 算数・数学つまずき調査結果と考察



1. つまずき調査の実施内容

平成25年11月下旬、飯山市内の8小学校、2中学校、2高等学校に加え、栄村・野沢温泉村・木島平村を含めた4市村内の12小学校、5中学校、2高等学校の協力を得て実施しました。尚、調査問題と実施時間は(表1)のように設定しました。

(表1)

対象	出題分野						合計	H25 5月と共通問題	時間	
	小学校問題			中学校問題		高校問題				
小学6年生	6問 (共通)	1問 (共通)	1問 (小高共通)	7問			15問	14問	20分	
中学3年生				1問 (共通)		8問 (共通)	4問	20問	19問	30分
高校2年生			1問 (小高共通)				1問	8問	25問	25問

- (1) 5月調査と11月調査の間で比較をするために、基本的に同じ調査問題で実施しました。
- (2) これまでの11月(平成22年度まで1月)調査と同様に小6, 中3の学習内容問題に一部差し替えをしました。
- (3) 小学校・中学校問題の中に小中高, 中高共通問題を設定し、校種間のデータをとれるようにしました。

2. 調査結果の概要

過去3カ年の調査人数, 得点率(100点換算)の平均と標準偏差は, (表2)のような結果でした。

(表2)

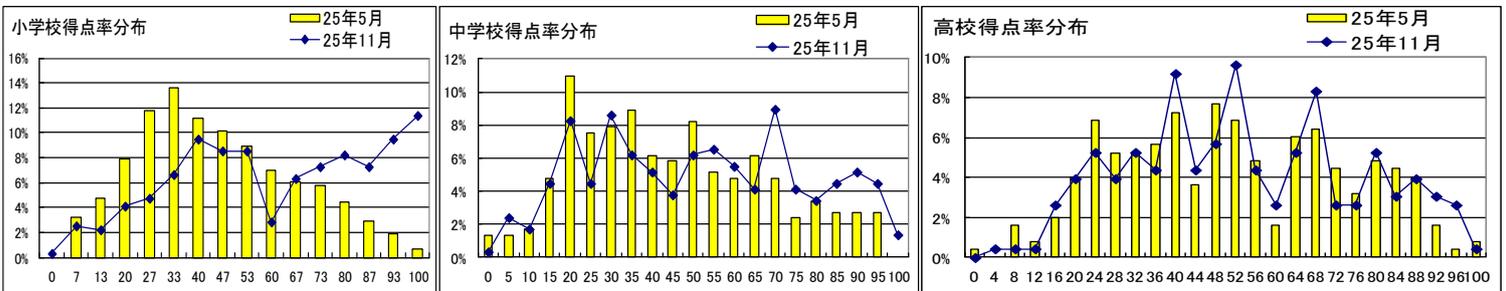
得点率の概要	小学校						中学校						高校					
	H23 5月	H23 11月	H24 5月	H24 11月	H25 5月	H25 11月	H23 5月	H23 11月	H24 5月	H24 11月	H25 5月	H25 11月	H23 5月	H23 11月	H24 5月	H24 11月	H25 5月	H25 11月
データ数	294	297	288	287	315	317	327	330	310	309	291	290	229	230	225	221	248	228
最大値	100	100	100	100	100	100	95	100	95	100	95	100	100	100	100	100	100	100
最小値	0	0	0	0	7	0	5	10	0	0	0	0	8	12	0	0	0	4
平均	42.2	52.3	40.5	56.1	45.0	61.4	41.4	49.1	43.3	51.6	44.9	51.2	53.9	56.9	52.0	54.8	51.4	53.3
標準偏差	21.8	23.3	22.5	23.9	21.6	27.3	20.5	22.8	23.2	24.6	21.4	25.9	22.1	24.0	23.6	27.0	22.5	22.5

※一部の問題を差し替えてあるので、平均を単純に比較することは注意が必要です。

3. 得点率分布

小学校・中学校・高校それぞれの5月調査, 11月調査の得点率分布をグラフ(図1)で示しました。5月調査から11月調査にかけての得点率の変化がわかります。

(図1)



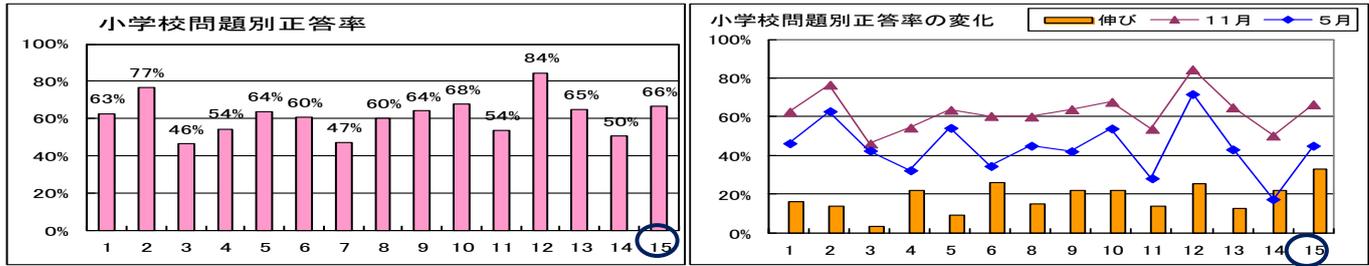
*5月から11月にかけて小学校の得点率平均の上昇が最も大きく、次いで中学校・高校の順に上昇しています。標準偏差は小学校・中学校・高校ともに大きくなっており、5月から11月にかけて散らばり度が大きくなったことを示しています。(表2)

*5月の調査と比べると、小学校では分布が大きく右に移動(得点率が上昇)し、得点率の高い層が増加しています。中学校・高校では全体的に右に移動し、得点率の高い層と中間層がともにやや増加しており、得点率の低い層でのつまずきが少しは解消されたと考えられます。各学校における指導の成果が現れていると思われます。(図1)

4. つまずき調査の問題別正答率

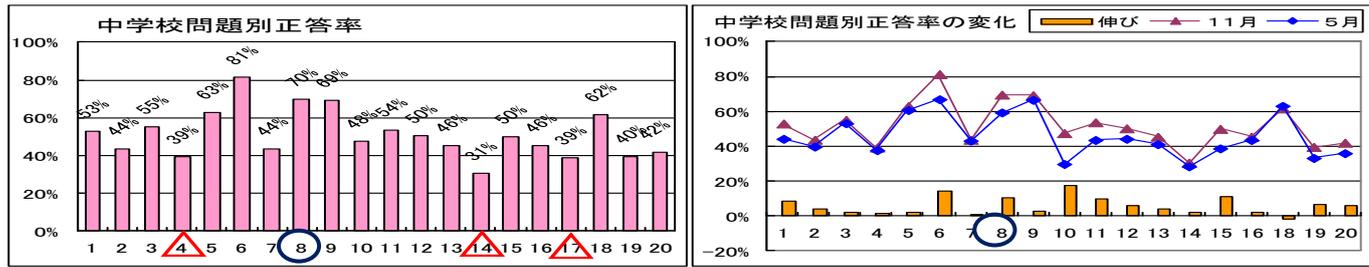
(1) 小学校 ※○は今年度新たに出题した「立方体の展開図で重なる辺」の問題

(図2)



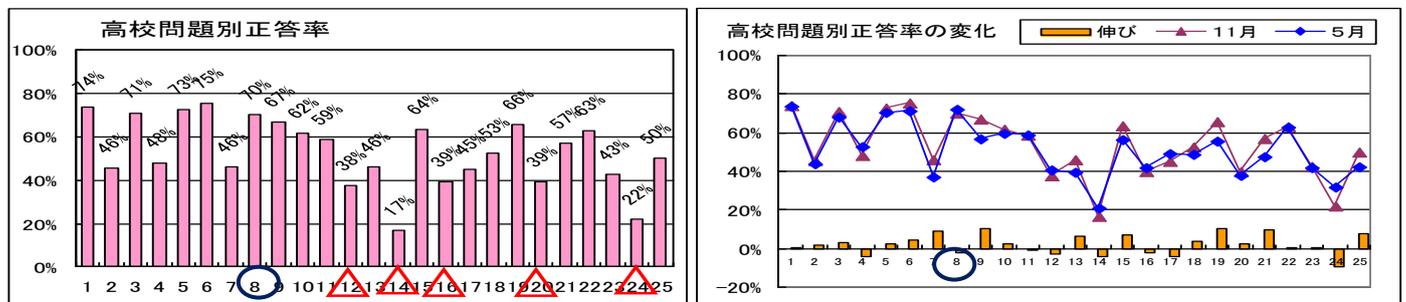
- ①正答率 60%以上の問題は 10 問(5 月調査は 2 問)でした。(1) (5) (6) (8) (9) (10) (13) (15) が今回新たに 60%に到達
- ②正答率 40%未満の問題は 0 問(5 月調査は 4 問)でした。(4) (6) (11) (14) が今回新たに 40%に到達
- ③同一問題 14 問すべての正答率が上昇しました。

(2) 中学校 ※△は正答率が 40%未満の問題 ○は今年度新たに出题した「立方体の展開図で重なる辺」の問題 (図3)



- ①正答率 60%以上の問題は 5 問(5 月調査は 4 問)でした。(8) が今回新たに 60%に到達
- ②正答率 40%未満の問題は 3 問(5 月調査は 6 問)でした。(2) (10) (15) が今回新たに 40%に到達
「4: 分数のわり算の立式 (小 6 年)」 「14: グラフから一次関数の立式 (中 2 年)」 「17: $y=ax^2$ の y の変域 (中 3 年)」 で正答率が低下しました。
- ③同一問題 19 問中 18 問の問題の正答率が上昇しました。
「18: 回転体の名称 (円錐) (中 1 年)」 で正答率が低下しました。

(3) 高校 ※△は正答率が 40%未満の問題 ○は今年度新たに出题した「立方体の展開図で重なる辺」の問題 (図4)



- ①正答率 60%以上の問題は 10 問(5 月調査は 6 問)でした。(9) (10) (15) (19) が今回新たに 60%に到達
- ②正答率 40%未満の問題は 5 問 (5 月調査は 5 問) でした。

「12: グラフから一次関数の立式」 「14: $y=ax^2$ の y の変域」 「16: 円柱と円錐の体積比」 「20: 絶対値の計算」
「24: 直角三角形の $\sin\theta$ の計算」

- ③25 問中 17 問の正答率が上昇しました。

「4: 分数のわり算の立式」 「8: 立方体の展開図で重なる辺」 「11: 一次方程式」 「12: グラフから一次関数の立式」
「14: $y=ax^2$ の y の変域」 「16: 円柱と円錐の体積比」 「17: 連立方程式の利用」
「24: 直角三角形の $\sin\theta$ の計算」 で正答率が低下しました。

* 小学校・中学校においては、ほとんどの問題の正答率が 5 月調査と比べ上昇し(図 2, 3), 正答率が 60%を超える問題の数が増え, 40%に満たない問題の数が減りました。また, 小学校においては昨年度の 11 月調査と比べても正答率が高くなっている問題が多く見られます(14 問中 10 問)。

* 今年度新たに出题した図形の問題については, 「立方体の展開図で重なる辺」は小学校・中学校において, 5 月調査よりも正答率が高くなっています(図 2, 3)。

* 高校では, 小学校の全 8 問中 2 問, 中学校の全 9 問中 4 問で正答率が 5 月調査と比べて下がりました(図 4)。つまずきを解消するために, 学び直しを行う必要があると思われます。



5. 小学校・中学校・高校の共通問題の結果

小学校・中学校・高校の正答率は(図5)のようになりました。

(1) 小学校と中学校の正答率比較

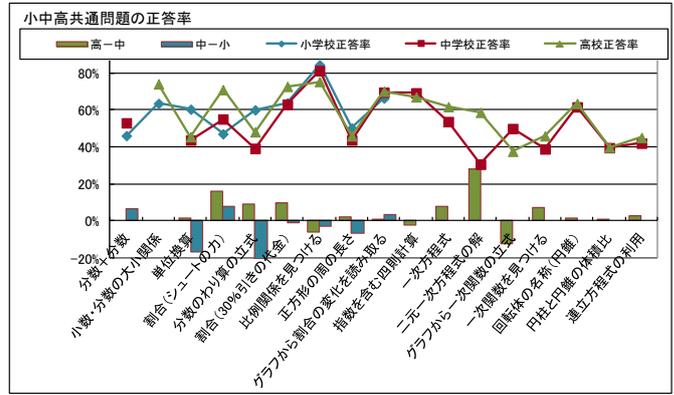
「単位換算」「分数のわり算の立式」「割合(30%引きの代金)」「比例関係を見つける」「正方形の周りの長さ」の5問で小学校が中学校の正答率を上回りました。

(2) 中学校と高校の正答率比較

「比例関係を見つける」「指数を含む四則計算」「グラフから一次関数の立式」の3問で中学校が高校の正答率を上回りました。

(3) 小学校と高校の正答率比較

「単位換算」「分数のわり算の立式」「比例関係を見つける」「正方形の周りの長さ」の4問で小学校が高校の正答率を上回りました。

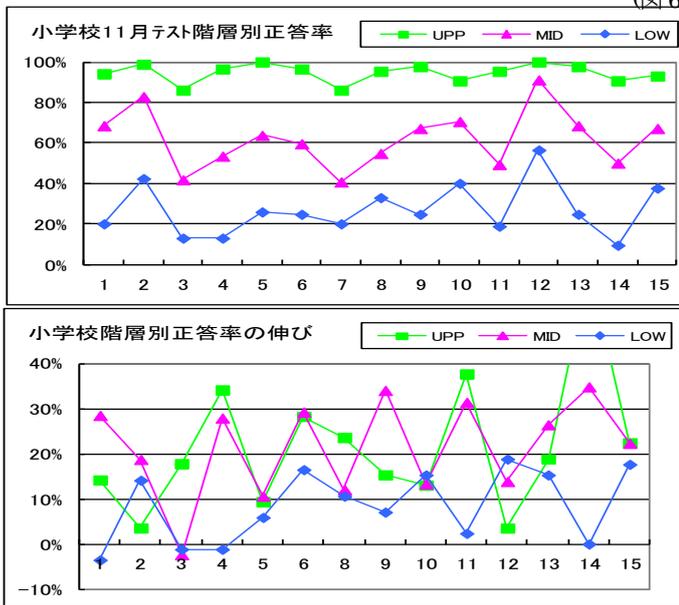


6. 階層別正答率結果の分析 (UPP層:上位27%, MID層:中位46%, LOW層:下位27%)

小学校・中学校・高校の階層別正答率と、5月調査から11月調査への伸びは以下になりました。

(1) 小学校階層別正答率結果と階層別正答率の差および伸び

(図6)



①正答率が最も低かった問題

UPP層とMID層で「7:分数のわり算の立式」、LOW層で「3:分数+分数」の正答率が最も低くなりました。

②階層ごとの正答率の差

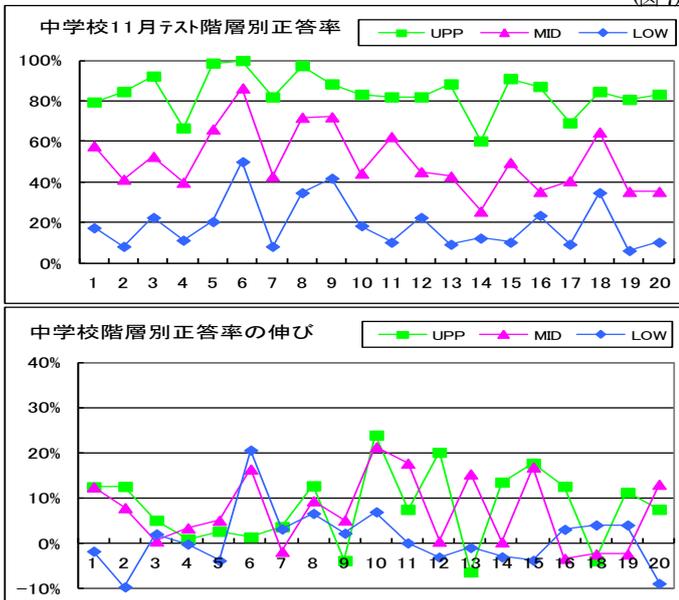
「1:四則計算」「5:小数・分数の大小関係」「9:割合(30%引きの代金)」「13:三角形の面積」「15:立方体の展開図で重なる辺」はUPP層で正答率80%, MID層で60%を超えましたが、LOW層では40%に満たなかったのでもつまずきがあると思われます。

③階層ごとの正答率の伸びについて

「4:小数のかけ算の方法」「6:単位換算」「11:単位量あたりの大きさ(花壇の球根)」「14:正方形の周りの長さ」はUPP・MID層が大きく伸びました。「1:四則計算」「3:分数+分数」「4:小数のかけ算の方法」ではLOW層の伸び率がマイナスになりました。

(2) 中学校階層別正答率結果と階層別正答率の差および伸び

(図7)



①正答率が最も低かった問題

UPP層とMID層で「14:グラフから一次関数の立式」、LOW層で「19:円柱と円錐の体積比」の正答率が最も低くなりました。

②階層ごとの正答率の差

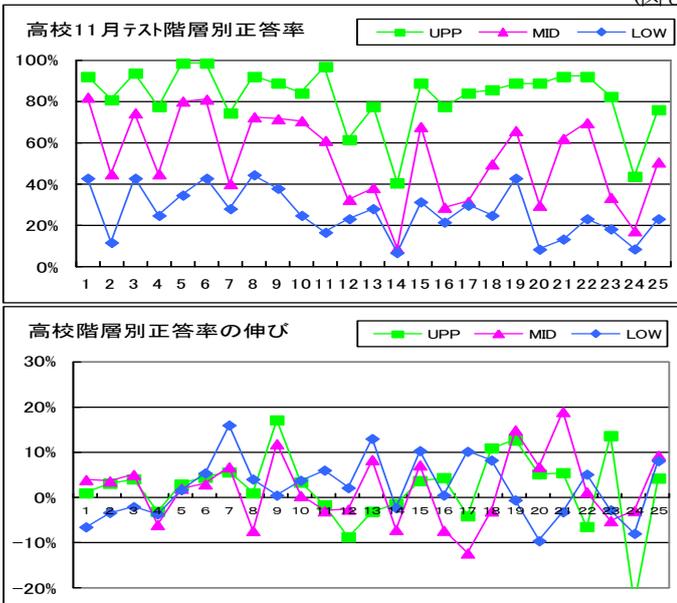
「5:割合(30%引きの代金)」「8:立方体の展開図で重なる辺」「11:一次方程式」「18:回転体の名称(円錐)」はUPP層で正答率80%, MID層で60%を超えましたが、LOW層では40%に満たなかったのでもつまずきがあると思われます。

③階層ごとの正答率の伸びについて

「10:文字式の計算(分数式)」「15:反比例するyの値」はUPP・MID層が大きく伸びました。LOW層は「6:比例関係を見つける」が大きく伸びましたが、「2:単位換算」「20:連立方程式の利用」など10問で伸び率がマイナスになりました。

(3) 高校階層別正答率結果と階層別正答率の差および伸び

(図 8)



①正答率が最も低かった問題

すべての階層において「14: $y=ax^2$ の y の変域」の正答率が最も低くなりました。

②階層ごとの正答率の差

「20: 絶対値の計算」「23: 二次関数のグラフから符号を読み取る」はUPP層のみ正答率が80%を超えました。「5: 割合(30%引きの代金)」「9: 指数を含む四則計算」「10: 一次方程式」「11: 二元一次方程式の解」「15: 円柱と円錐の体積比」「21: 二次方程式」「22: 二次関数のグラフの頂点」はUPP層で正答率80%, MID層で60%超えましたが、LOW層では40%に満たなかったのです。つまり、差があると思われます。

③階層ごとの正答率の伸びについて

「7: 比例関係を見つける」はLOW層で正答率が大きく伸びました。「23: 二次関数のグラフから符号を読み取る」はUPP層のみ正答率が伸びました。

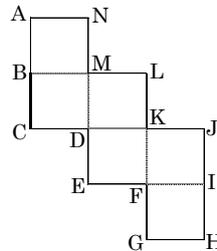
- * 小学校では、すべての問題において、UPP層の正答率が80%を超えました。「14: 正方形の周の長さ」の問題において、階層ごとの正答率の伸びに大きな差が見られました。特にLOW層では、伸びがほとんどなく、問題文の読み取りも含めた、より丁寧な指導が大切になると思われます。
- * 中学校では、「15: グラフから一次関数の立式」「17: 一次関数を見つける」などの関数の問題において、UPP・MID層では正答率が大きく伸びた一方、LOW層ではあまり伸びが見られませんでした。
- * 高校では、「14: $y=ax^2$ の y の変域」「24: 直角三角形の $\sin \theta$ の計算」などの問題において、すべての層の伸び率がマイナスとなっており、丁寧な学びなおしが必要です。

7. H25年度からの新問題～空間図形に関する問題～

つまずき調査の問題について検討をしていく中で、普段の授業の様子から子どもたちの苦手な部分について中学校では円錐の表面積や回転体の体積などが挙げられ、高校では空間ベクトルや多面体などが挙げられました。ここから空間図形に関するつまずきの様子を探ろうということで、H25年度は右のような2問を新たに出题しました。左の問題は小学校4年「立方体と立方体」からの出题で小・中・高の共通問題、右の問題は中学校1年「空間図形」からの出题で中・高の共通問題としました。

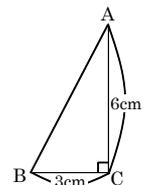
「立方体の展開図で重なる辺」
下の展開図を組み立てたとき、辺BCに重なるのはどの辺ですか。

- ① 辺JI
- ② 辺IH
- ③ 辺HG
- ④ 辺FE
- ⑤ わからない

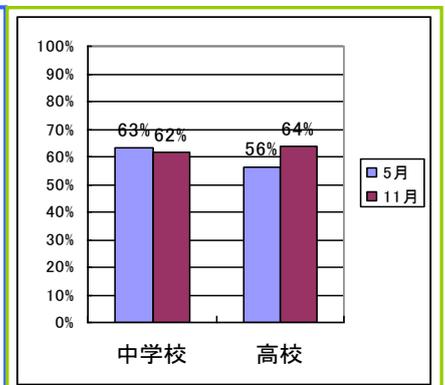
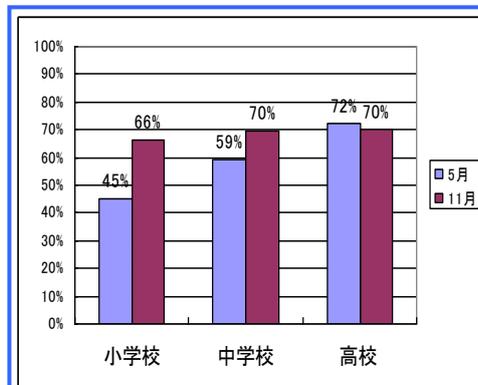


「回転体の名称(円錐)」
下の図の△ABCは、∠C=90°の直角三角形です。この三角形を、辺ACを軸として1回転させてできる立体はどれですか。

- ① 三角錐
- ② 三角柱
- ③ 円錐
- ④ 円柱
- ⑤ わからない



(図 9)



今年度の結果は右のようになりました。「立方体の展開図で重なる辺」では、5月の段階で小学校の正答率が45%と低かったのですが、その後の指導の成果で11月には66%に上昇しました。各学校での説明の時には「どう教えるか難しい」「感覚的とならえになってしまう」といったことが話題となりました。今後どのような指導が有効かを探っていきたく思います。

「回転体の名称(円錐)」では、中学校での正答率がわずかではありますが、5月から11月にかけて低下しました。5月と11月の共通問題は中学校問題では17問ありましたが正答率が低下したのはこの1問のみです。受験に向けて復習が進められる中でもこのような知識理解を問う内容についてはその機会が十分ではないと思われます。注意をしていきたいところです。

今後も、経年変化を見ながら、よりよい指導法について考えていきたいと思います。

II 学習意識調査結果と考察

1. 質問に対して肯定的な回答の割合

質問の選択肢が「①とてもそう思う」、「②少しそう思う」、「③あまりそう思わない」、「④まったくそう思わない」の4つである質問項目について、肯定的な回答（①と②の合計）を集計しました。また選択肢「①遅い（易しい・少ない）～⑤速い（難しい・多い）」のうち③ちょうどよいという回答を集計しました。それらの割合と、その変化は次のようなグラフ（図10～12）になりました。

(1) 小学校の結果（図10）

多くの項目で肯定的な回答の割合が高く、11月調査で80%を超えるものは8項目でした。特に高かった項目は「算数・数学は役立つ(92%)」「他の解法はためになる(92%)」「みんなで考える方がよい(92%)」「宿題は毎日やる(92%)」「練習問題の時間がある(91%)」でした。算数の有用性やみんなで考えることの良さを実感できており、日頃の指導の成果が現れていると思われます。

5月調査と比べて11月調査の方が肯定的な回答の割合が増加した項目は「他の解法はためになる」「練習問題の時間がある」「家族とよく話す」「計画をやり通す」「進む速さがちょうどよい」「宿題の量はちょうどよい」でした。

最も低い項目は「発言や質問をする(50%)」です。例年の調査でも最も低くなっている項目です。5月調査の52%と比較して微減してはいますが、昨年の11月調査の42%と比較すると増加しています。

(2) 中学校の結果（図11）

肯定的な回答の割合が11月調査で80%を超えた項目は、「他の解法はためになる(87%)」「途中も書く(81%)」「みんなで考える方がよい(85%)」などの5項目でした。中学校の授業の中で「いろいろな解法で解く」ことは数学の学習で大切であることが、生徒の中にも定着しているものと思われます。

50%を下回った項目は「発言や質問をする(39%)」の1項目でした。

肯定的な回答は9項目で11月調査の方が高くなっており、特に増加したのは「いろいろな方法で解く」でした。逆に5月調査より減少した項目は「授業は楽しい」「練習問題の時間がある」「宿題は毎日やる」「宿題の量はちょうどよい」などの10項目となっています。

宿題に対する意識変化を5月調査と11月調査とで詳細に比較すると「宿題は易しい」14%→18%「宿題は難しい」14%→20%「宿題は少ない」7%→17%となっています。問題の難易度が高まってきている時期であること。生徒の方は数学学習意識の二極化が微妙に進んでいるためと思われます。

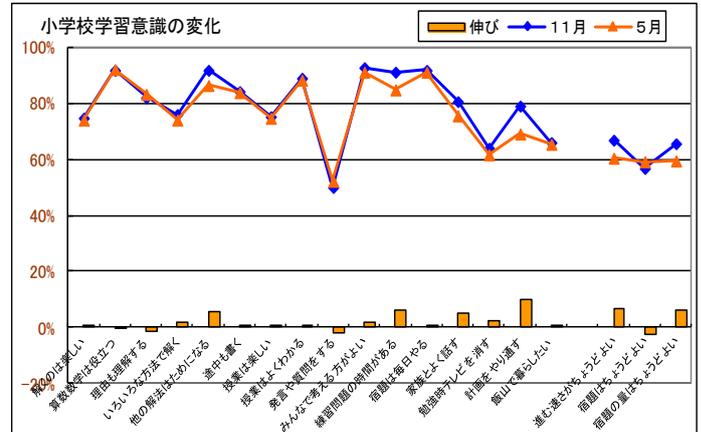
(3) 高校の結果（図12）

肯定的な回答の割合が11月調査で80%を超えた項目は「途中も書く83%」でした。

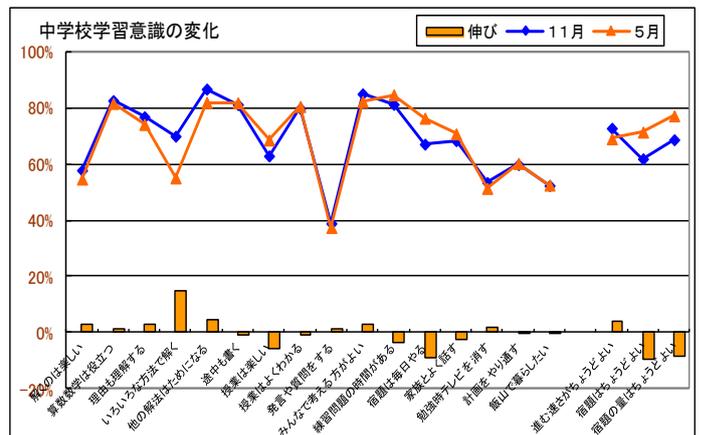
50%を下回った項目は「発言や質問をする(20%)」「宿題は毎日やる(31%)」「地元で暮らしたい(43%)」「宿題の難易度はちょうどよい(46%)」「宿題の量はちょうどよい(33%)」の5項目でした。11月調査では「数学に関する項目」で肯定的な回答の割合が5月調査と比べて減少しましたが、これは授業の内容の難化に伴うところもあると考えられます。

図12のグラフの形状は、昨年と同じ形状です。しかし、昨年11月の調査では「解くのは楽しい」「数学は役立つ」「授業は楽しい」「家族とよく話す」「宿題の量はちょうどよい」などで5月より肯定的回答が増加していました。それらと比較すると今年度は生徒の意識が低調といえます。

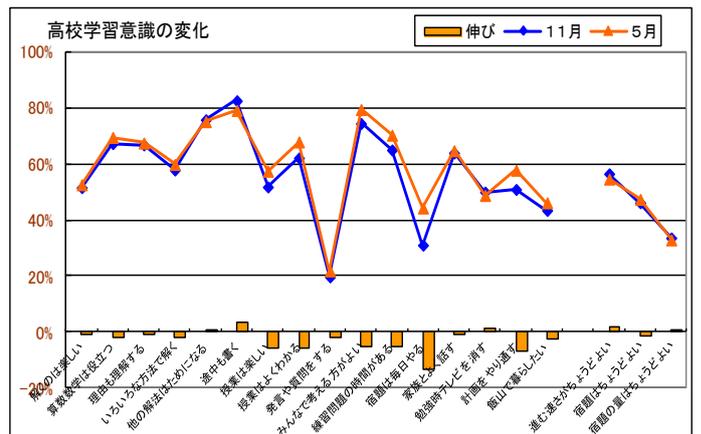
(図10)



(図11)



(図12)



2. その他の項目について

(1) 算数・数学 好きな分野と嫌いな分野(図 13-15)

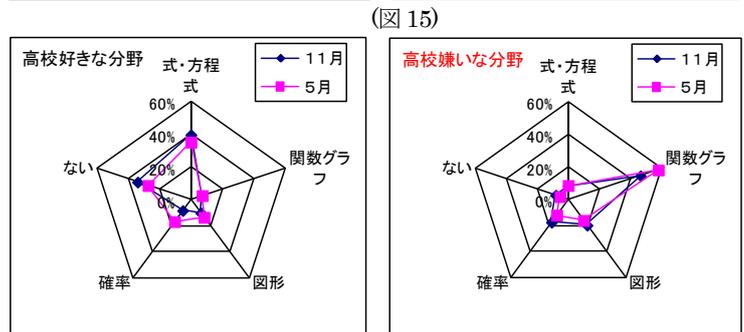
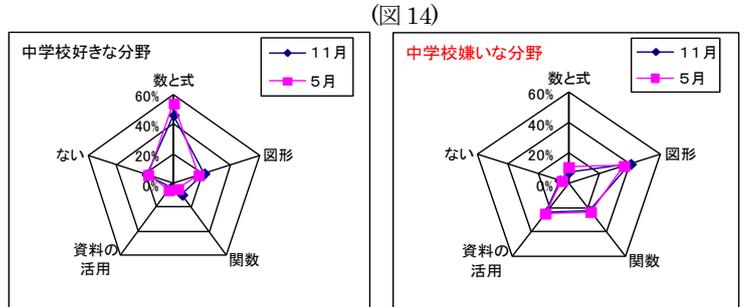
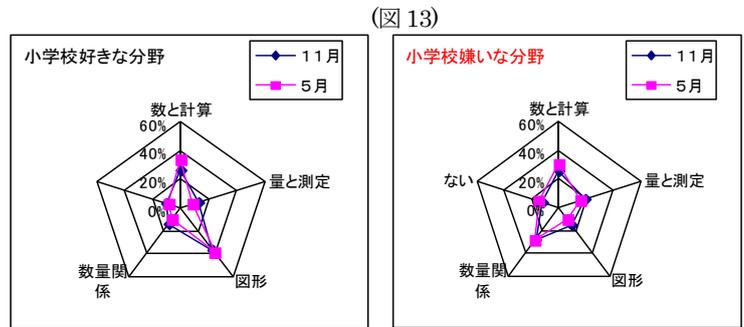
① 小学校では、昨年同様に5月・11月調査ともに「図形」が好きであり、「数量関係」が嫌いな分野である様子が見られます。H20～22年度では「計算」が5月調査では嫌いな分野であったものが11月調査では好きな分野に移行するという傾向が見られましたが、「数と計算」「数量関係」に変更された事によって、より明確になったのではないかと思います。

② 中学校でも、昨年同様5月・11月調査ともに好きな分野が「数と式」で、嫌いな分野が「図形」である様子が見られます。一昨年度までは「関数・グラフ」が嫌いな分野であったことから、生徒はグラフも図形の分野と認識しているのではないかと思います。

③ 高校では、5月・11月調査ともに好きな分野が「式の計算・方程式」で、嫌いな分野が「関数・グラフ」である様子が見られます。これは過去5年間の調査と比較しても、同様の傾向を示しています。

また好きな分野なし34%も例年並であります。

④ 小中高を通して「計算」が比較的好きな分野であり、嫌いな分野は小学校・高校が「関数」で、中学校では「図形」である様子が見られます。



(2) 平日と休日の家庭学習時間 (図 16～17)

① 中学校では5月調査と11月調査を比べると平日、休日ともに「約30分～1時間」が減少し「ほとんどしない」および「1時間30分以上」が増加しています。約30分程度の学習時間を境として、この半年で学習をしなくなる生徒とますます数学の学習に時間をかける生徒の二極化が進んでいる気配があります。特に中学校では平日、休日ともに「2時間以上」が倍増しています。高校受験を意識した生徒が猛勉強を開始したことに関係あるのかも知れません。小学校では逆に、平日においては5月調査と11月調査を比べると「約30分～1時間」が増加し「ほとんどしない」および「1時間30分以上」が減少しています。

② 平日と休日とを比べると、5月調査と11月調査を比べると中学校、高校ともに休日の学習時間が平日より増加しています。小学校では平日の学習に時間をかけ、休日は数学の学習以外に時間をかける傾向があるようですが、中学校、高校と進むと休日における数学の勉強に時間をかけるようです。部活動の影響があるかもしれません。

(3) 授業で分からないことがあったら (図 18)

① 小学校では5月調査と11月調査とを比べて、「先生に聞く」よりも「友人に聞く」の方が多くなりました。「みんなで考える方がよい」の項目で肯定的な回答の割合が高かったことと合わせて、全体追求の浸透が感じられます。

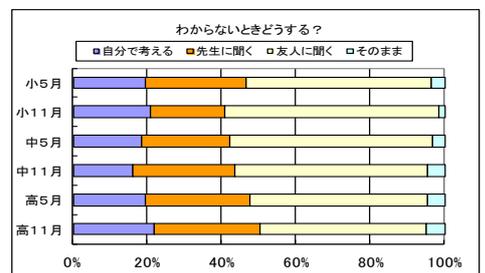
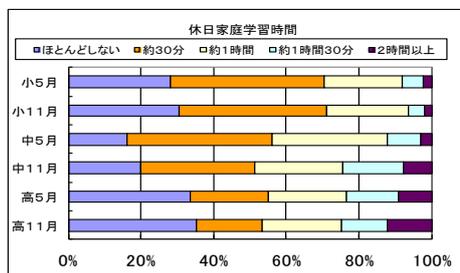
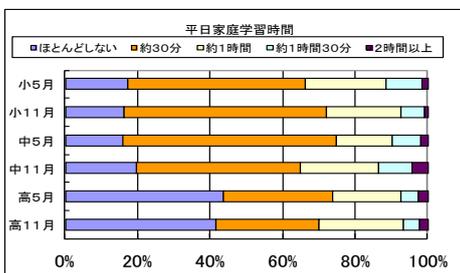
② 中学校では、11月調査では「先生に聞く」が増加しています。逆に「自分で考える」が減少しています。学習で苦労しているのかもしれない。家庭学習の状況とも合わせてさらに細かい指導の必要性が感じられます。

③ 高校では、11月調査では「先生に聞く」がやや増加しました。内容の難化に伴い、「発言や質問をする」が5月調査より増加していることと合わせて、先生を積極的に利用する傾向が見られます。

(図 16)

(図 17)

(図 18)



Ⅲ 週末わくわくプリントの活用

(1) H25年度の「週末わくわくプリント」への取り組み

事務局では、授業と家庭学習を結びつけていくことを目的とした「3-Stepプリント」をH22年度より提案してきました。そして、その成果をもとに週末家庭学習用プリントとして「週末わくわくプリント」をH24年度から提案してきました。1年目のH24年度は、戸狩小学校の6年生に協力をお願いし、6年生版を作成してきました。2年目となるH25年度は、常盤小学校の5年生に協力をお願いし、5年生版の作成をするとともに、サイボウズ（飯山市内のネット回線）を利用して飯山市内のどの学校からも6年生版のファイルが利用できるようにしてきました。

(2) プリントの構成

プリントは3部構成になっています。また裏面に解答を載せ、自分で答え合わせができるようにしています。

①<今週の学習を確実に！>

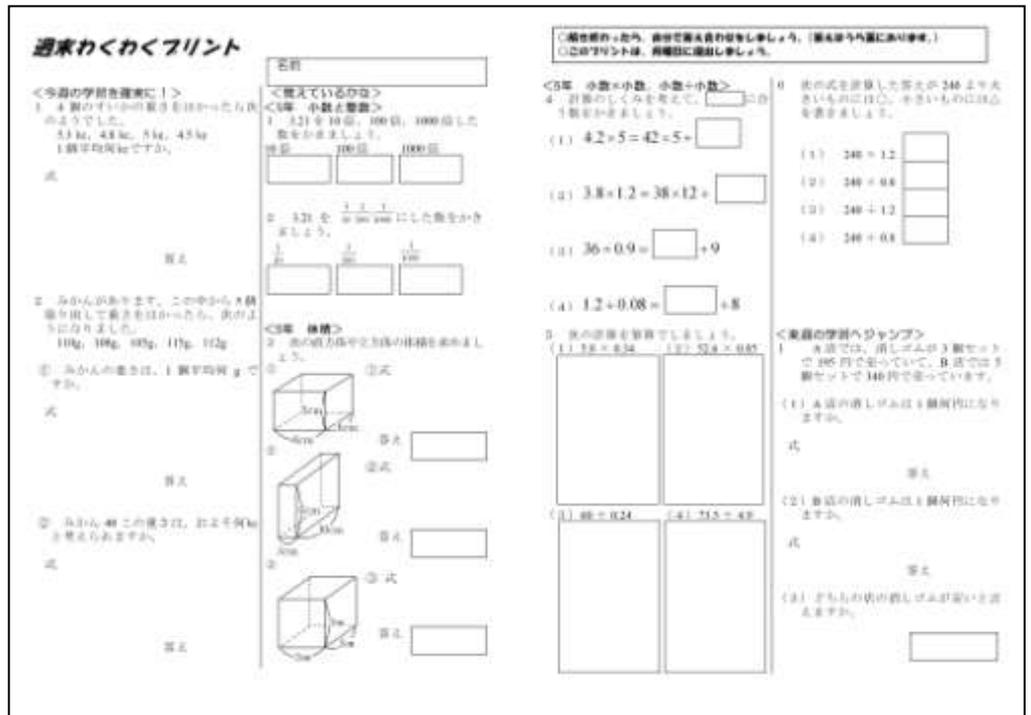
その週の月曜日から金曜日までの学習に直結するものです。

②<覚えているかな？>

以前に学習した内容についての復習です。全学年までの内容も含め学び直しができるようにしたいわゆる「スパイラル学習」になっています。

③<来週の学習へジャンプ！>

来週の学習内容について考えていく上で必要となりそうなことながら（既習事項）を思い出すことができるようにするための問題です。



(5年生版 週末わくわくプリント)

(3) プリントの使用方法

6年生版「週末わくわくプリント」No.01～No.38はサイボウズ上にアップしてありますので、飯山市内の先生方はそれぞれのパソコンから自由に使えるようになっています。

まずは、サイボウズを立ち上げ、そのトップ画面から「ファイル管理」をクリックして、「中高交流学力向上事業」→

「週末わくわくプリント(6年)」と進んでいきプリントを選択してください。各プリントのおよその内容は「はじめに」フォルダの「内容」ファイルを参考にして



(サイボウズ トップ画面)

ください。なお、今後5年生版も引き続きアップしていく予定です。

(4) 今後の方向

実際にプリントを使って家庭学習に取り組んできた子どもたちにアンケートに答えてもらったところ、「問題が難しい」という回答がH24年度は30%、H25年度は60%にのぼりました。これは算数が苦手な子どもたちがそう答えているということになり、学習内容の定着が心配な子どもたちへの支援としては十分に機能していないという課題が見えてきました。どのような問題を選んでいくことが学力向上に繋がっていくのかをさらに考えていくことによって、より有効なプリントにしていきたいと考えています。

それぞれの学級・授業で「家庭学習をいかに授業と結びつけることができるか、またその家庭学習の中にかに以前の学習内容の復習を取り入れていくことができるか」をぜひ考えてみてください。そして、その実践の様子を事務局へお知らせください。それぞれの取り組みを交流させながら、よりよいものにしていくことが児童生徒の学力向上につながっていくと考えています。ご協力をよろしくお願いいたします。

IV まとめ

(1) 研究や取り組みの成果

①授業交流

今年度は、日台教諭（城北中学校）が飯山北高校の1年生に5時間と飯山市内の小学校に週7時間、伊藤教諭（飯山北高校）が城南中学校の3年生に週2時間、中村教諭（飯山北高校）が城北中学校の3年生に週2時間、それぞれ授業交流を行いました。常盤小学校では「週末わくわくプリント」を使用して、授業と家庭学習の関連について実践させていただきました。年間を通して異なる校種の教員が授業に入ることによって小・中・高の児童生徒たちがつまずき内容に類似性があることを実感し、算数・数学の学習内容の系統性を活かしたつまずきの解消を模索しました。また、異校種間での交流を通して、小中の丁寧な授業、高校の演習を中心とした授業など授業方法についても交流を深めました。



【授業交流】
←城南中学校
飯山北高校→



②調査問題の実施と活用

岳北4市村すべての小・中学校と市内の高校に協力していただき、PDCAサイクルの一環として年2回の調査を実施しました。5月調査(プレテスト)の集計結果を各校に報告し、関係される先生方のご協力をいただき、つまずきが大い内容を意識して授業改善など取り組んでいたことにより、11月調査(ポストテスト)ではつまずきのある問題が減り、全体の正答率が上がりました。特に「割合」の問題でのつまずきが解消に向かっていることは、先生方のご指導の成果であると感謝しています。また、今年度は新しく小学校・中学校それぞれの分野から空間図形に関する問題を1問ずつ扱いました。11月調査の集計結果も、さらに活用していただきたいと思えます。

③情報の共有

つまずき調査・学習意識調査は、各校別に報告と説明をさせていただきました。調査報告のまとめやD-Linesの活用パンフレットを作成し、調査協力校に配布いたしました。今年度は7月11日(木)城南中学校・飯山北高校において公開授業および昨年度の研究報告会を行いました。さらに、1月21日(火)には市内の小学校5年生の担任、中学校・高校の数学科の先生方にご参加いただき、「算数・数学つまずき調査・学習意識調査説明会」を予定しています。

④北高チューター

夏と秋の年2回「北高チューター」として高校生が中学校を訪問し、学習の手助けや学校生活等について、生徒同士の交流による学力向上の取り組みを行いました。今年度も市内2中学校と野沢温泉中学校の3校で実施しました。高校の2次統合を控え、(現)飯山高校の生徒がチューターとして参加したことも大きな成果でした。



【北高チューター】城北中学校

(2) 次年度へ向けて

①授業交流など

市内2中学校と高校の授業交流を継続し市内全体の子どもの学力向上に努めたいと考えています。また、小学校との授業交流も継続して行い、小・中・高が連携してお互いのよさを取り入れ、算数・数学を系統的に指導していけたらよいと思えます。これらを多くの先生方に参加していただけるように継続・発展させていきたいと考えています。

②調査問題について

引き続きPDCAサイクルの一環として、5月調査、11月調査の年2回の調査を行いたいと思えます。各校の先生方のご意見をいただき、CRTや全国学力テストとも関連性を持たせながら問題を吟味して、調査を継続したいと考えます。また、小・中・高で苦手とする分野に系統性があるのかを分析し、原因の追求と解決を模索していきたいと考えています。引き続き「正答が得にくい問題・概念を教えるための教材開発」、「空間図形に関するつまずきを、さらに明らかにするための問題開発」にも取り組みたいと考えています。

③教材研究と情報の共有化

学習指導要領に合わせて、小・中・高での情報共有、および各校内の学年間での情報共有を深めていくことが大切であると考えます。つまずきのある分野やその指導方法について、事務局でも各校での取り組みを集約し、HPなどで発信していきたいと思えます。

小・中・高のグランドカリキュラムデザインを利用し、内容のつながりを意識することでの授業改善へ向けて取り組みたいと考えます。特に「D-Lines」については、導入の時期から各学年における系統性を持った使用方法を研究していきたいと考えています。また、「3-Stepプリント」や「週末わくわくプリント」の内容・事例の充実と活用を目指し、実践へ向けて先生方からの協力もいただきながら作成・活用していただけるように進めていきたいと思えます。

④北高チューター

今年度と同様に、夏と秋の年2回「北高チューター」を実施したいと思えます。さらには大学生の参加により、児童・生徒同士の交流と同時に、大学生の地域での活躍の場としても活用していきたいと思えます。